



Title	英語における副詞類の位置の歴史的変遷について : (1)問題提起と研究の方向
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪外大英米研究. 1992, 18, p. 163-176
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語における副詞類の位置の歴史的変遷について

(1) 問題提起と研究の方向

大 津 智 彦

1 歴史的に見た英語の語順、特に古英語の語順については非常に多くの研究がなされてきているが、そのほとんどが S, V, O が文の中に占める位置についてのものであって、副詞類についてはその文における重要性にもかかわらず位置を詳細に扱っているものはないと言ってよい。^{1,2)}

例えば、最新の重要な研究成果まで考慮に入れ古英語の統語法研究においては現在最も権威的であるとされている Mitchell (1985) を調べてみると、副詞類の位置には “fixed rules of precedence” はなく、³⁾ Quirk and Wrenn (1955) を引用して古英語における副詞類の位置の自由さは現代英語の場合と同じであると結論づけて、⁴⁾ 様々な位置に現れる副詞類の用例を挙げているだけである。

最近の国内での研究において、加藤 (1985, 1989) は生成文法の理論を用い一見自由に見える古英語の語順から規則性を引き出そうとするものであるが、その中で副詞類 (前置詞句) 等の位置に関し、動詞により下位範疇化される場合は語順は決まっているとし、Mitchell 等よりも一歩進んだ考え方を示しているが、下位範疇化されない場合は比較的自由であったとして大部分の副詞類は考慮の枠外に外されている。

というわけで、古英語の統語法を扱った文献において、副詞類の位置に関しあえて規則が与えられているとすれば、大体のところ副詞句は修飾する語の前に位置し、前置詞句になると文の中部から後部に置かれるのが普通であると記述されているのみである。それを示す具体例を挙げると、

(1) . . . & ðæt suiðe wælhreowlice gecyðde

(. . . and showed that very cruelly)

(Brown : 71)

(2) *ac he wile biddan on sumera*

(but he will beg in summer)

(Brown : 69)

しかし、古英語を少し詳しく読んでみると副詞類の位置はこんな単純な規則では片付けられないことに気がつく。副詞類が動詞の前に位置したり、前置詞句が文の後部より置かれるのは現代英語でも普通に見られる現象でそのまま受け入れやすいが、古英語では(3)のように動詞と目的語の間に副詞句が入ったり、その他、SVOの語順は現代英語と同じでも副詞類が現代英語ではおかしい位置に現れたりする。

(3) *and he worhte ða ƿone man mid his handum*

(and then he created man with his hands)

(4) *Ælc lof bið on ende gesungen*

(Each hymn is sung at the conclusion)

(5) *ƿær ƿær heo æfre bið on ƿinungum wunigende*

(. . . where she is ever dwelling in divine services)

(以上3例 Mitchell : 964)

ところで、現代英語における副詞類の位置の研究はまだ十分であるとは言えないものの、例えば、Greenbaum (1969, 1976, 1977), Jacobson (1964, 1975, 1981), Quirk et al (1972, 1985), Jackendoff (1972)、Emonds (1976) 等で盛んに行われており、既に多くの事実が発掘されつつあり、もはや現代英語において副詞類の位置は自由であるとして済ませておく段階ではない。もう少し詳しく言うならば、副詞類の位置は、それが文において義務的要素であるか否か、単一の副詞句なのか前置詞句になっているのかどうか、時、場所、様態、程度、その他一体どんな意味を持つのか、語句を修飾するのか、文を修飾するのかという文法的機能は何か等によって左右されるし、また、文の情報構造も大きな影響を及ぼし、強調される要素、対照される要素、旧情報を担う要素などが文頭に出され、焦点、新情報を担う要素等が文末に回される傾向があることが知られている。⁵⁾

現代英語において副詞類の位置に関し以上のような条件を考慮に入れ研究

英語における副詞類の位置の歴史の変遷について

が進められていることを考えると、過去の英語においても副詞類の位置は自由であると放っておかず、同様な研究が行われてしかるべきだと思われるのである。さらに、これまで等閑視されていた歴史的に見た副詞類の位置の研究が S, V, Oなどの要素も合わせた古英語以降の統語構造変化の解明のヒントになる可能性もある。これらの理由からここに英語における副詞類の位置の歴史の変遷に関する調査を始めようとするわけである。

2. 1 その為にはまず現代英語ではこの問題についてどれだけの事実が明らかになっているかを見ておく必要がある。ここで言う事実とは、異なった副詞類がそれぞれどのような位置にどのような分布を見せているかという記述的な問題、そしてまたどうしてそれぞれの副詞類がその位置を占めているかという説明的な問題の両方を指す。両面において副詞類の研究が最も進んでいる時代区分である現代英語における研究成果を見て、研究の方向や枠組みをおおまかに設定し、補うべきところがあればそれを明らかにしてその作業を行うことにする。そしてそれを土台として過去の英語における研究に入るとともに相互の比較をして歴史的な変化を浮き彫りにしようと思う。

2. 2 まず副詞類の分類について概観した後、今回の調査の中心であるその位置に関し詳しく見る。その際、伝統的な記述文法、近年の生成文法、あるいは談話の文法といった理論の枠組みにとらわれず、それらの研究によって明らかにされた有益と思われる事実は適宜取り上げていく。副詞類の位置について全体像を掴もうと思えば多くの角度から光をあてることが大切で、一つの理論に片寄ると問題の一部しか見ることができない。

2. 3 副詞類全体について主にQuirk et al (1972, 1985) を参考に分類を試みる。副詞類は形式、機能、意味による分類が可能でそれぞれ次のように下位分類される。この分類はそれぞれ副詞類という同じ対象を違った視点から分けたものであり、どの副詞類もこれら3つの視点による分類が可能で、

大 津 智 彦

各副詞類は例えば形式は前置詞句、機能は付接詞、意味は空間という具合に細かく区別されるわけである。ただし、特に機能と意味においては副詞類の分類は難しく、明確に区別できないボーダーラインをまたぐ場合もあることを指摘しておかなければならない。以下、それぞれの分類とその要点を見ていく。

(6) 形式

副詞句	She telephoned <i>recently</i> .
前置詞句	She telephoned <i>in the morning</i> .
名詞句	She telephoned <i>last week</i> .
無動詞節	She telephoned <i>though obviously ill</i> .
非定形動詞節	She telephoned <i>hoping for a job</i> .
定形動詞節	She telephoned <i>after she had seen the announcement</i> .

(7) 機能

付接詞	The concert lasts <i>two hours</i> .
従接詞	<i>Bitterly</i> , she buried her children.
離接詞	<i>Sadly</i> , the storm destroyed the entire crop.
合接詞	<i>Therefore</i> , he had to give up smoking.

(8) 意味

空間	{位置	He lay <i>on his bed</i> .
	{方向	They drove <i>westwards</i> .
	{距離	She had driven <i>fifty kilometres</i> .
時間	{位置	He was there <i>last week</i> .
	{期間	I shall be staying here <i>till next week</i> .
	{頻度	I've only been there <i>three times</i> this year.
	{関係	He had visited his mother <i>already</i> when I saw him yesterday.

英語における副詞類の位置の歴史的変遷について

過程	方法	He <i>carefully</i> studied the map.
	手段	He goes to school <i>by bus</i> .
	道具	They hit him <i>with clubs</i> .
	動作主	The patient was treated <i>by a famous doctor</i> .
視点		They are advising me <i>legally</i> .
随伴	原因	She died of <i>cancer</i> .
	理由	He bought the book <i>because of his interest in metaphysics</i> .
	目的	He bought the book <i>so as to study metaphysics</i> .
	結果	She had spent all her money, <i>so she couldn't buy the ring</i> .
	条件	<i>If you work hard</i> , you will pass the exam.
	譲歩	<i>Despite his lack of enthusiasm</i> , he won.
	強意	She has <i>certainly</i> been enthusiastic about her work.
	近似	She has <i>probably</i> been enthusiastic about her work.
法性	制限	She has been enthusiastic <i>only</i> about her work.
程度	拡大	I <i>badly</i> want a drink.
	縮小	She helped him <i>a little</i> with his work.
	尺度	She had worked <i>sufficiently</i> that day.

まず(6)の形式による分類についてであるが、それは用語から自明なので詳しい記述は省くが、Quirkらが中心に進めている The Survey of English Usageによると各々の下位類の頻度は次のようになっている(筆者によりデータの提示方法を一部編集)。これでわかるように形式による分類では副詞類は大部分が副詞句と前置詞句に分かれるのである。

(9)

副詞句	45.3	
前置詞句	40.6	
定形動詞節	8.9	
非定形・無動詞節	3.2	
名詞句	2.0	
副詞類	100.0	%

次に機能による分類に関しては、その判断基準についてはQuirk et al (1985) に詳しいので、ここではおおまかな考え方のみを説明すると、付接詞はS, V, O等と同じように文に組み込まれ、文の主要要素の一部として働き、従接詞は文全体や S, V, Oなどの文の要素の従属物としてそれを修飾したり特徴づけたりし、離接詞は文から一步離れて、話者がその内容に対して評価を与えたり、真偽性についてコメントを加えたり、自らの態度を表したりし、合接詞は前後の文のつながりを示す役割を持つ。それぞれ(7)の例文を参照されたい。

最後に意味による分類であるが、(8)が副詞類が持つ大体の意味である。下位範疇にまで細かく気を配って分類しているのは同じ範疇に属していても、少しの意味の違いで異なった振る舞いを見せることがあるからである。しかし、先にも述べたように副詞類を意味に従って分類しようとする場合、時に非常に困難なことがある。例えば(10)ではsuddenlyが二つの意味を兼ねている。

(10) He stopped the car *suddenly*. (方法と期間)

また(11), (12)では同じformallyが異なる意味に使われている。

(11) He greeted the bishop *formally*. (方法)

(12) Those points are realized *formally*. (視点)

英語における副詞類の位置の歴史的変遷について

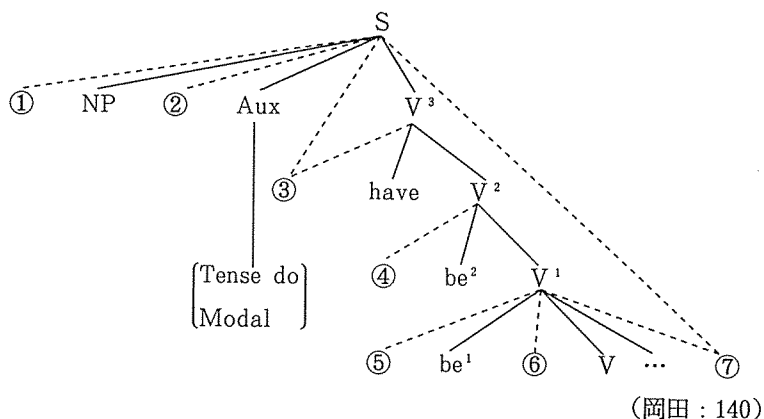
意味による分類に際しては、文脈も十分に考慮にいれ細心の注意を払う必要があるゆえんである。

以上、現代英語の副詞類について形式、機能、意味による分類を行ったが、これは後に述べるように分類の巧拙が副詞類の位置の研究の価値に大きな影響を与えるので特にここで取り上げることにした。ここでは現在最も綿密で発達していると思われる Quirk et al (1985) の考え方を採用し、本調査を進める際に必要な注意事項を付け加えた。

2. 4 次に現代英語の副詞類の位置について現在までの研究を参考に考察する。その際、文においてどの部分が副詞類の位置として候補に挙げられるか、そしてどのような副詞類がどうしてそれぞれの位置に現れ得るかが問題になるが、主に Jackendoff (1972) の分析や Jacobson (1964, 1975), Quirk et al (1972, 1985) 等の記述的な研究を考慮に入れながら見ていく。

まず下に樹形図を示す。これにより現代英語の文が最大限にまで展開されている。⁶⁾

(13)



この樹形図において円で囲まれた数字の部分が副詞類の現れる位置と考えられる。ではどのようにして副詞類はそれぞれの位置に現れるのか。Jackendoff (1972) は副詞類すべてを包括的に扱ってはいないが、この点について次のように考えている。つまり、(16) にあるような様態副詞句、(17) の merely, utterly のようにこの位置にしか現れない副詞句、(18) のような義務的な副詞句、(19) における -ly では終わらない副詞句、(20) の話者指向副詞句及び主語指向副詞句において、(16) - (19) は VP 内で (14) の句構造規則により、(20) は文副詞として (15) の句構造規則により生成されるものとしている。⁷⁾ (14) の句構造規則によって生成される副詞句の内、特に (16) (17) の -ly で終わる副詞句は V の直前、(18) のような義務的な副詞句は V の直後、または O、C がある場合はその直後、(19) の副詞句はこれを前置詞句とみなし文尾に生成させている。

$$(14) \quad VP \rightarrow (have-en) - (be-ing) - (Adv) - V - (NP) - \left(\left\{ \begin{array}{c} Adv \\ PP \end{array} \right\}^* \right)$$

$$(15) \quad S \rightarrow NP - Aux - VP - \left(\left\{ \begin{array}{c} Adv \\ PP \\ S \end{array} \right\}^* \right)$$

(16) John completely ate the beans.

(17) Albert is merely being a fool.

(18) Steve worded the letter carefully.

(19) Tommy didn't do amusing things like that before.

(20) Evidently Horatio has lost his mind.

Jackendoff (1972) の分析では VP 内に生成される副詞句は基底部で生成された位置に停まり、S 節点に直接支配される副詞句は Keyser (1968) の transportability convention により S 節点に直接支配されている限り他の位置に自由に移動できると考えられている。これによると (13) の樹形図では文副詞は①、②、③、⑦、VP 内副詞は⑥、⑦の位置に現れることになり、⁸⁾ そ

英語における副詞類の位置の歴史的変遷について

それぞれの位置に来る副詞句に理論的な説明ができると同時に (21)–(25) が非文になる説明を与えることができる。(21)–(25) ではいずれも本来VP内の副詞句がS節点に支配されていたり、S節点に支配されるべき副詞句がVP内にあったりで不適格になってしまう。

- | | | | |
|------|-----------|---|---|
| (21) | *George | completely | $\left\{ \begin{array}{l} \text{has read the book.} \\ \text{is finishing his carrots.} \\ \text{was ruined by the tornado.} \\ \text{will lose his mind.} \\ \text{did eat up the cabbage.} \end{array} \right.$ |
| (22) | ? *George | will completely | $\left\{ \begin{array}{l} \text{have read the book.} \\ \text{be finishing his carrots by now.} \\ \text{be ruined by the tornado.} \end{array} \right.$ |
| | | has | $\left\{ \begin{array}{l} \text{been finishing his carrots.} \\ \text{been ruined by the tornado.} \end{array} \right.$ |
| | | is | being ruined by the tornado. |
| | | will have | read the book. |
| (23) | *George | will be probably | $\left\{ \begin{array}{l} \text{finishing his carrots.} \\ \text{ruined by the tornado.} \end{array} \right.$ |
| | | has been | $\left\{ \begin{array}{l} \text{finishing his carrots.} \\ \text{ruined by the tornado.} \end{array} \right.$ |
| | | is being | ruined by the tornado. |
| (24) | John | will have | $\left\{ \begin{array}{l} \text{?probably} \\ \text{*rapidly} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{been beaten by Bill.} \\ \text{been finishing the job.} \end{array} \right.$ |
| (25) | John | $\left\{ \begin{array}{l} \text{will be} \\ \text{has been} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{*probably} \\ \text{*rapidly} \end{array} \right\}$ | being beaten by Bill. |

((21) – (25) まで Jackendoff : 75-6)

以上は副詞句に関する分析だがJackendoff (1972) は前置詞句についても(14)、(15)の句構造規則により生成させ副詞句と同様の分析を行っている。

Jackendoff (1972) の上記の研究は副詞類の生起位置を統語理論から説明しているもので大変興味深い。現実の語法面から見ても、VP内副詞((16)–(19))と文副詞((20))の位置の特徴や移動性についての両者の差異等に関して、Quirk et al (1985) やJacobson (1964) の記述的研究は彼の分析を裏付けするデータを示しており、扱っている範囲内においては言語事実を正しく反映していると言える。しかし問題点として、Jackendoff (1972) では対象としている副詞類の種類は少なく、またその分類もQuirk et al (1985) における程の緻密さが見られず、⁹⁾ さらに(13)の③(VPに支配された場合)、④、⑤の位置に来る副詞類の説明ができていない点等あり、現実の多様な用法に対応するにはさらに理論を精緻化する必要がある。

Greenbaum (1976) 及びJacobson (1964, 1975) は副詞類の位置に関し現実に現れる用法を記述的に捉えようとしている研究である。前者は被験者に与えられた副詞句をセンテンスの適当な位置に埋め込ませるいわゆる elicitation techniqueを使い、副詞句の標準的な位置を調べている。この研究ではまだ扱われている副詞句の数、種類が少ない上、文脈を与えられていない短文に副詞句を挿入する作業なのでその位置を左右する大きな要因である情報構造が全く考慮に入れられていない欠点がある。後者はコーパスに基づく詳細な統計的研究で、Jacobson (1964) の主な特徴は、副詞類を機能一形式一意味の順に下位分類化していき、意味の段階でそれぞれの副詞類の位置の分布を明らかにしている。この研究は現代英語の副詞類の位置の実体を知る貴重な資料と言えるのだが、研究の要とも言える副詞類の分類法がQuirk et al (1985) に見られる現在の進歩段階に比べ未熟で、例えば統語構造への組み込まれ方が違う付接詞と従接詞を同列に扱い、本来同じ範疇に属する副詞類間での位置の現れ方の類似性や、異なる範疇間での相違性を見逃したりしている。Jacobson (1975) は非常に綿密で大部な研究で、副詞

英語における副詞類の位置の歴史的変遷について

類の位置に影響を持つ要素として個人差、テキストの媒体（話しことばか書きことばか）・分野・文体、節の種類、主語の種類、動詞句の構造、各副詞句、その範疇、その他合計10要素を設定して各要素の影響下での副詞句の位置を調査するとともに、異なる二つの要素をまんべんなく選んでペアを作り（ $10 \times 9 / 2 = 45$ ペア）、各ペア内における二つの要素の相互作用下での調査を行っている。しかし、この研究では先のJacobson（1964）における副詞類の分類上の欠点に加え、主なる調査の対象が助動詞を含む文における最初の助動詞の直前（Jacobsonの言う pre-finite-auxiliary mid-position 又は（M2））に現れる副詞句のその位置（M2）での頻度に限定されている。

このほか副詞句の位置に関する研究では、最近の生成文法において節内からの副詞句の抜き出しの可能性や、動詞句内での動詞と副詞類との結びつきの強さの違いから見た動詞句内での副詞類の位置の差異に関するもの等があり、また談話文法を用いて情報構造上から分析を行う研究も見られる。これらはいずれも副詞類の位置を説明する際参考となるが現在のところ対象にされている範囲が非常に限られている。大きな枠組を設定するには役に立たないのでここでは取り上げない。

2. 5 以上、現代英語における副詞類の分類と特にその位置に関する研究を概観し、その問題点を指摘してみた。これが現時点での研究レベルになるわけであるが、記述的なもの説明的なものどちらの面においてもまだ改良・発展の余地が残されていると言える。前者においては、適切な副詞類の分類に基づいた位置の分布に関する正確な情報が必要であり、後者においては、もちろんここでも副詞類の厳密な分類を前提として、統語構造内でそれぞれの副詞類の占め得る位置の明示及びその位置を占める説明に関し分析の精緻化が望まれる。

2. 1で記したように、本論では副詞類の位置に関しては最も研究が進んでいる現代英語における分析を枠組みにして過去の英語を調査しようとしているのであるが、今述べた理由からそれをそのまま活用することはできない。

われわれはまず現代英語における研究から採るべきところは採り、改良すべきところは改良してから枠組みとして設定しなければならない。次回はその作業から入ることにする。(1991年9月15日)

註

1. 現代英語での話であるが Quirk et al (1985), p. 478によると、副詞類からなる文の要素の頻度は主語、動詞に続いて多いとされている。
2. ここでいう副詞類とは主語、動詞、目的語、補語等とともに文を構成する一要素を指す。よって次の文におけるイタリック部は文の要素の一部に過ぎないので副詞類ではない。
(i) I saw a *very beautifully* dressed girl.
(ii) I keep the bicycle *in the garage* well oiled.
3. Mitchell (1985), p. 980.
4. 前掲書, p. 659.
5. 岡田 (1985), p. 137.
6. この樹形図の統語構造は最新の研究で分析が進められているものとは異なるが、現在のところ広く副詞類の位置を説明するには他に適当な候補がないのでとりあえずそのまま採用する。但し、これはJackendoff (1972) において用いられているものにAkmajian, Steele, and Wasaw (1979) の案を取り入れてVPに階層をもせたものである。V¹, V², V³は階層の異なる動詞句を示し、haveは完了形、be²は進行形、be¹は受動態を形成する際それぞれ助動詞の役割を果たす。
7. 上の理由により (14), (15) の規則は (13) と一致しない。
8. Jackendoff (1972) ではVP内の③, ④, ⑤の位置についてはmerelyの類いの副詞句が自由に現れる可能性を述べているだけである。
9. 評価的離接詞、法的離接詞、頻度付接詞、ある種の合接詞が話者指向副詞として一括して扱われている。(岡田 (1985), p. 245.)
10. Quirk et al (1985) は分類に関しては最も厳密なものに属すると思われるが副詞類の位置に関しては一般的な傾向を述べているだけで、データによる実証はほ

英語における副詞類の位置の歴史的変遷について

とんどない。

又、例文もほとんどがinventされたものであるという。Sinclair (1991) , p. 101参照。

参考文献

- Brown, William H. (1970) . *A Syntax of King Alfred's Pastoral Care*, Mouton, The Hague.
- Emonds, J. (1976) . *A Transformational Approach to English Syntax*, Academic Press, New York.
- Greenbaum, S. (1969) . *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.
- (1976). "Positional Norms of English Adverbs," *Studies in English Linguistics* 4, pp 1-16.
- (1977). "Judgements of Syntactic Acceptability and Frequency," *Studia Linguistica* 31, pp.83-105.
- Jackendoff, R. (1972) . *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge.
- Jacobson, S. (1964) . *Adverbial Position in English*, Proprius, Stockholm.
- (1975). *Factors Influencing the Placement of English Adverbs in Relation to Auxiliaries*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.
- (1981) . *Preverbal Adverbs and Auxiliaries*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.
- Kato, K. (1989). 「古英語語順の不自由性」『人文科学論集』23, pp.149-58.
- Keyser, S.J. (1968). Review of Jacobson (1964), *Language* 44, pp.357-74.
- Mitchell, B. (1985). *Old English Syntax*, Vols. I and II, Clarendon Press, Oxford.
- Okada, N. (1985). 『副詞と挿入文』大修館, 東京。
- Ordeman, D. T. (1932) . "Position of Adverbs," *Journal of English*

大 津 智 彦

and Germanic Philology 31, pp. 228-33.

Quirk, R. and Wrenn, C. L. (1955). *An Old English Grammar*, Methuen, London.

Quirk, R. et al. (1985) . *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Sinclair, J. (1991). *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford University Press, Oxford.